

## D.H.ロレンスの作品に見られる赤色の意味について

経営学部  
山田 晶子

### (1)

筆者は拙著『D.H.ロレンスの長編小説研究——黒い神を主題として——』（近代文芸社、2009年）において、ロレンスの作品に頻出する黒い (dark) 色の意味及び象徴を、同じように頻出する白色と対比させて論じた。この論点を学生のために分かりやすく簡単に述べると、ロレンスの作品では黒い色は、近・現代におけるキリスト教会及び機械文明社会の批判を表すものとして描写されていることが多く、批判される側のものを白色で表すことが多い一方で、批判者を黒色で表していることが特徴であると論じたものである。この黒色と白色の葛藤にはロレンス独自の女性と男性の関係が絡んできている。そして、西欧文明の発達においては、キリスト教に関わって白色が光を象徴することが多いため、闇を象徴する黒色は否定的に捉えられてきた。しかしロレンスは闇を善なるものとして描いたことによって独自の思想を唱導し、世界に衝撃を与え、生前において、また死後も30年ほどはイギリス文壇でも排斥される傾向にあった（勿論熱烈な彼の信奉者達は多くいた）が、1980年代に、ロンドンのウェストミンスター・アペイ内にある「偉大な文学者顕彰コーナー」(The Poets' Corner) にロレンスの記念碑が建てられて、現代の偉大な作家であることが公に承認されたのである。ここに至るまでには、本人のみならず大勢のロレンスを擁護する良心的な文学者たちと保守的な世間との裁判になるほどの格闘があった。

さて、本稿では、既存の価値批判としてロレンスが用いた黒色と同様に、彼の作品に描かれている赤色もまた、ロレンスが重視する「血と肉」を

象徴するものとして重要な色と思われることを書きたい。筆者はこのことも先に言及した拙著の中で述べているが、拙著は学術論文集であるため素人には難解と思われるので、今回は赤色を描写している主な場面について学生に分かりやすくまとめてみようと思う。

### (2)

先ず、初期の長編小説として重要な作品に1913年に出版された『息子と恋人』があるが、この小説の主人公であるポール・モレルは、キリスト教を信仰し精神的な生き方を重視するため性を嫌悪するミリアムという十代の女性に物足らず、人妻である30代のクララと性的な関係を持つ。彼女は性的に奔放でありポールの性的な欲求を満足させてくれる。このときクララは「赤い色」を特徴として描かれている。真紅の赤レンガ色のカーネーションを身に着けている彼女はポールに「道を歩く真っ赤な固まり」と思われ、2人が性交をした後、カーネーションの花が散って花びらが「赤い小さなしぶき」のよう、と描写されて赤い血にたとえられている。これはクララの血を連想させる。更にポールはクララとの性交によって「情熱的な一種の火の洗礼」を受けたと描写されているが、これはキリスト教の「水の洗礼」に対立するものであり、ポールはクララを介して「ある偉大な力」を知ったように思う。クララは彼に宇宙的な力の存在を教えてくれたのであり、ロレンスは性交の意味をここに見出している。一方で、ポールの母親やミリアムは「白いユリ」や「白い野バラ」と関連付けられており、キリスト教の白い光を重視する2人の性質を表している。ポールの母親のガートルードは熱烈なキリスト教徒である。夫のウォルターとは性格や受けた教育の違いから、結婚後に対立するようになる。夫婦げんかの後で夫に家の外へ追い出されたガートルードは、月光を浴びて輝く大きな白いユリの花に魅了されるが、花の中に手を突っ込んだ彼女は白いキリスト教の世界に吸い込まれたかのようなのである。白いユリは聖母マリアの象徴であり、ガートルードは聖母マリアと同じように処女懐胎をしたかのような印象を読者に与える。この場面は彼女がポールを孕んでいた時であったから。彼女と異なり、夫のウォルター

は黒い色と同様に赤い色もその特徴として描かれる男性である。血色の良い頬や赤い唇を持ち官能的な男性であるウォルターは、また、その官能的な生命の柔らかさが「ろうそくの炎」として描写されて、それは精神性を超えたものであると叙述されているように、ウォルターはロレンスがその存在を肯定している男性と思われる。

次に中期の長編小説である1920年出版の『アルヴァイナの墮落』では、主人公アルヴァイナの家庭教師として独身女性のフロスト先生が登場している。彼女は男を知らない女性であり、アルヴァイナが女性として発展することを妨害する存在として批判的に描かれている。フロスト先生は30代であって若いのに白髪が特徴である。そして彼女はアルヴァイナにキリスト教の美德を教え込もうとするが、成長するにつれて彼女はフロスト先生の教えから外れて行き、ジブシーの芸人の1人であるチッチョと結婚するのである。アルヴァイナがフロスト先生から離れる時期を、ロレンスは、エーデルワイスという白い花を捨てて黒紫色と赤色のアネモネの花が重視されるべき時である、と描写している。エーデルワイスは白髪が特徴のフロスト先生の花であり、赤いアネモネの花は、黒い肌色のグラハムを愛したり、助産婦になったりして中・上流階級のレディには相応しくない生き方をするアルヴァイナ、更には芸人と一緒になってイタリアの未知の世界へ消えてしまうアルヴァイナの花なのである。

今回は『息子と恋人』及び『アルヴァイナの墮落』の2作品を取り上げて白い色が表すキリスト教世界と機械文明の世界を批判する赤い色が表す「血と肉」の世界を紹介した。このように、赤い色は黒い色と同様に、ロレンスの世界では重要な色として捉えられるべきものである。それは精神性ばかりでなく肉體性を重視することを唱道した彼の思想を表す「血と肉」の色となって彼の作品の多くの場面で描写されている。

## 英語の辞書について (5) 和英辞典

法学部  
北尾 泰幸

### 1. はじめに

語研ニュースNo. 21より英語の辞書に関する連載を続けてきたが、今号でひとまず終わりにしたいと思う。最終回は和英辞典を取り上げる。

学生諸君の中には和英辞典の使用頻度が高く、英和辞典、英英辞典...と連載が続き、なぜ次は和英辞典を取り上げないのかと思った学生もいただろう。私としては、今まで取り上げた英和辞典・英英辞典・コロケーションに関する辞典・シソーラス、そして今回の和英辞典の中では、和英辞典の使用頻度がいちばん低ければ嬉しいと思っている。というのは、和英辞典を引くと、和英辞典を引くだけで終わりにするのではなく、その後で必ず英和辞典や英英辞典、そしてできればコロケーションに関する辞典、シソーラスを引いてほしいと思っているからである。これはどういうことを意味しているのか、説明しよう。

### 2. 和英辞典の引き方

「表現英語」の授業（新カリキュラムでは「Writing」）で英語のライティングを教えている。授業は「英語で考え、英語で書く」ことを目標にして進めているが、今まで英語を書いた経験が少ない学生もいるし、また日本語で書かれた文章を英語に直すのではなく、真っ白な紙に英語を書いていく、いわゆる「自由英作文」の形を取ることが多いので、やはり春学期のうちは日本語を介して英語を書く学生が多いようである。ただ、日本語を頭に浮かべながら書いている状態とはいえ、私は学生諸君は和英辞典を必要以上に引いてしまっているような気がしている。